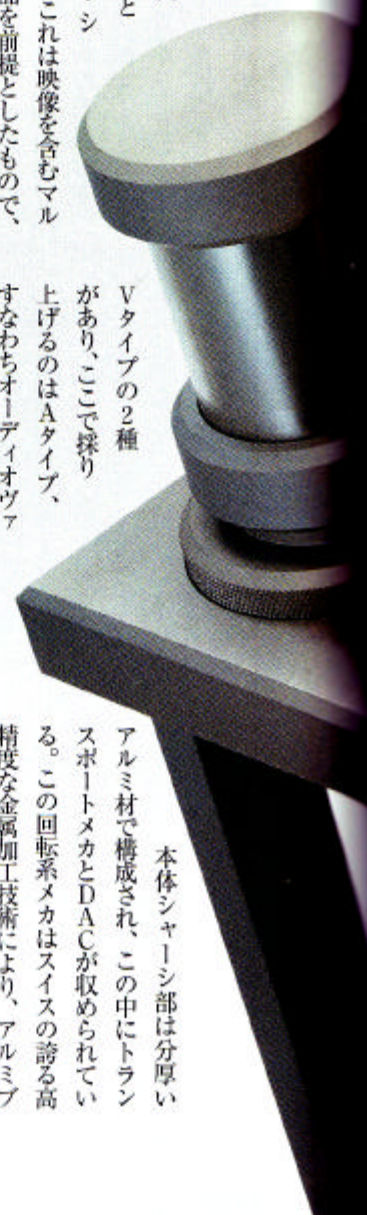


GOLDMUND Eidos Reference-A

圧倒的な安定感と存在感
桁外れのマルチフォーミュラプレーヤー
柳沢功力

ゴールドムンドには、3年前のエイドス38を1号機とするエイドス・シリーズがある。これは映像を各々マルチメディア製品を前提としたもので、1号機はCD/DVDトランスポート。2号機のエイドス18MEはユニバーサルプレーヤーだった。このシリーズがわれわれにとって例のメイシスほど馴染み深くないのは、製品がその2機種のみだったこともあるし、また製品の性格が本誌より姉妹誌HiVi向きと云える。映像よりの機體だったからだ。

ここで紹介するのも実はエイドス・シリーズ機で、これが第3作目。しかも今度のは桁外れと言ってもはばからない、超高額のユニバーサルプレーヤーだ。同社では本機をマルチフォーミュラプレーヤーと称し、全世界で50台の限定品とのこと。
このモデルには同価格でAタイプと



Vタイプの2種があり、ここで採り上げるのはAタイプ、すなわちオーディオヴァージョンとも呼べる本誌向きのモデルだ。ちなみにVタイプはビデオヴァージョンで、こちらには映像プログレッシブ回路を装備。Aタイプはその回路を装備しないわけだが、その分、付属の専用テーブルが音質重視の特別仕様になっている。

**重量級専用テーブル上で
フローティングされた
本体シャーシ**

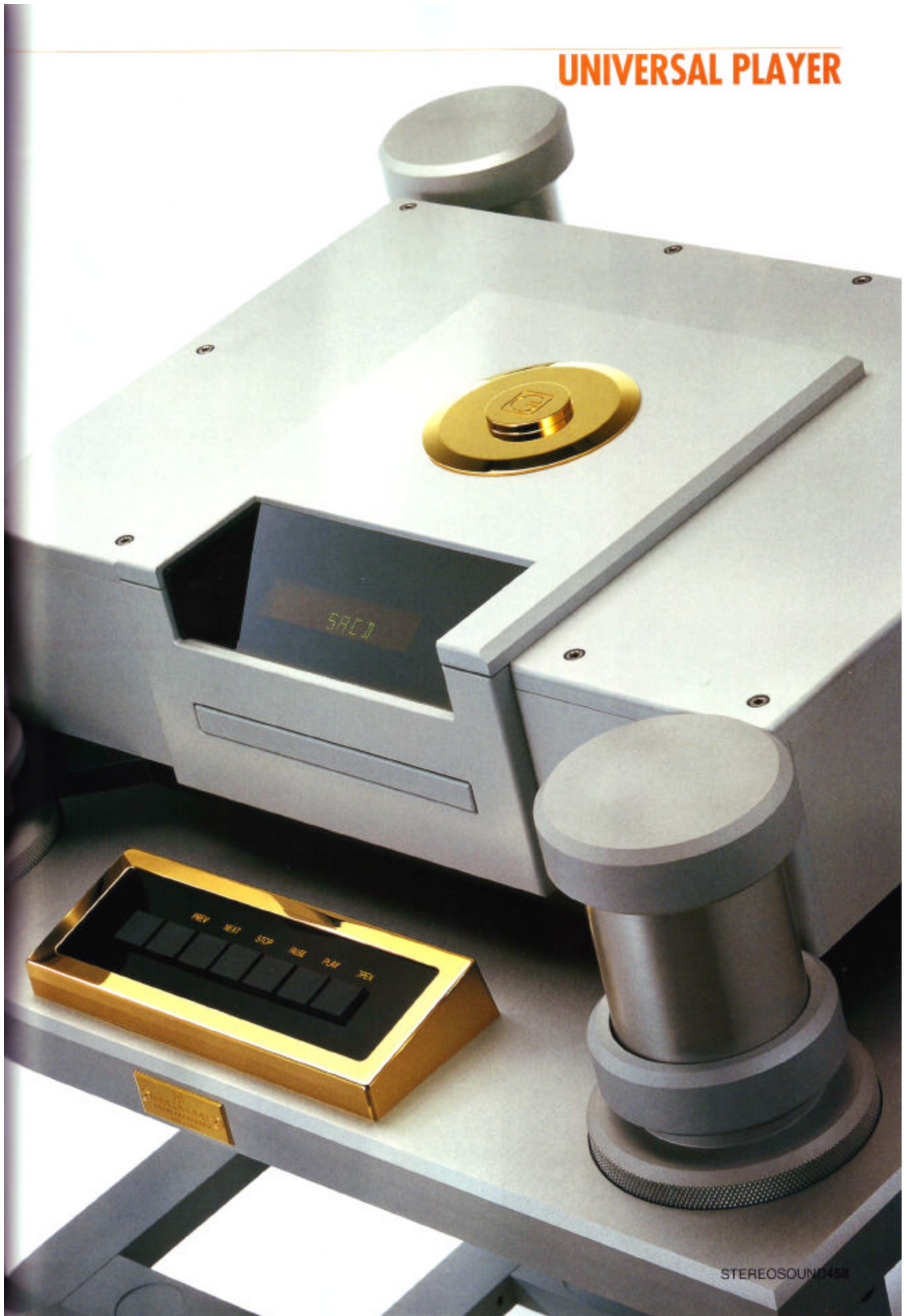
まず驚くのは本機のサイズと重量。専用テーブルにセットした状態での、幅58cm/奥行55cm/高さ70cm/重量75kgは、コンソール型のプロ用アナログプレーヤーかと感うばかり。箱型の

本体シャーシ部は分厚い

アルミ材で構成され、この中にトランスポートメカとDACが収められている。この回転系メカはスイスの誇る高精度な金属加工技術により、アルミブロックから削り出された精密部材が、つちりサポートされるとともに、アルミ切削クランプの付加や、ビクアップヘッド部に導入された、独自の三次元マグネティック・ダンピングシステムなどで高精度化を図っている。その結果、回転精度は極限まで高められ、信号読み取り精度の向上とともに、電氣的サーボによるエラー補正にも頼ることのない、クリーンでピュアな信号ビクアップを実現しているとのことだ。加えてディスクトレイも精密な切削アルミニウム製を採用。

DACはハイグレードなD/Aコンバーター、メイシス20MEで活躍しているアライズ回路によるもの。こ

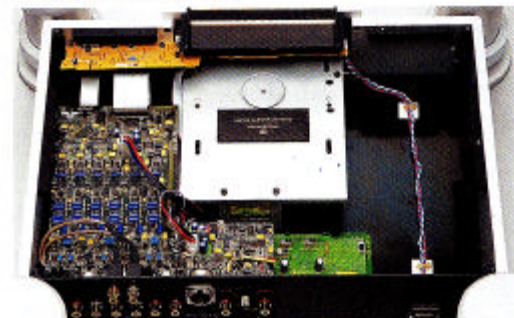
UNIVERSAL PLAYER



STEREOSOUND458



本体シャーシ部は専用テーブル上に設置された4本の大型サスペンションでフローティングされる構造。テーブル下(裏)側に取り付けられた黒いシャーシは電源部である。出力端子は用途に合わせて豊富に搭載され、アナログ出力は2系統を装備。リアパネル左上部に設けられた2個のアンプバランス端子は2ch専用アナログ出力で、その下は6ch用アナログ出力用のアンプバランス端子となる。いっぽう合計4系統装備されたデジタル出力(PCM)は、それぞれ出力される信号のフォーマットが異なり、2系統の同軸出力(RCA)は、1つがDTS/ドルビーデジタルなどのビットストリームも出力可能なもの、もう1つは96kHz/24bitにアップサンプリングされた2ch専用のもの。1系統のみの装備となるXLR端子はCD再生時のみ有効となり、デコーディング回路を通らずにPCM(44.1kHz/16bit)信号をダイレクトに出力する。他に光(ST)出力も装備。



天板をはずし後方から眺める。電源部を別シャーシに収めたため、内部はスペースに余裕をもたせてあり、中央にドライブメカ。左に音声基板という配置となっている。音声基板上にチャンネルごとに分かれて6列に並んでいるのは、192kHz/24bitに対応した最新のAlize5回路採用のD/Aコンバーター。



専用テーブル上で本体シャーシを支える大型サスペンションはスプリング式。下部を回転させることにより、高さ調整が行なえ、本体シャーシの水平をとることが可能となっている。



ゴールドムンドによって、徹底的にリファインされたドライブメカ。ベースはバイオニア製のメカであるが、モーターなどの可動部分を含め、ほとんどの箇所に手が入えられ、もはや別物といえるドライブメカとなっている。大きく目を惹くメカ上部のカバーや、それを支える支柱はアルミを切削加工したもの。ディスクトレイやディスクを挿入するクランプも、同様に切削加工されたアルミが採用されている。



5個のトランスを搭載し、一見、パワーアンプと間違えるほどの強力な電源部。配置は左側前方からデジタル出力回路用、その後ろにロジック回路用、アナログ回路用と続き、右側の2つのトランス付近が電源コンディショナー、そしてその後ろがメカブロック用電源というもの。

これはD/A変換後のアナログフィルターに深いこだわりをもって開発したという、いかにも同社らしいものだが、その最新ヴァージョンで、従来の96kHz/24ビットに対し192kHz/24ビットへのハイサンプリング化をはたし、SACDおよびDVDオーディオの再生を可能にした「アライズ5」を6ch分搭載。ここではさらにパーツの徹底した高品質化などにより、帯域幅やタイムレスポンスの速度および精度を飛躍的に向上という。

このメカや回路は、同社伝統のメカニカル・グラウンディング設計でシャーシ内にセットされ、内部で発生する振動を確実にアース。さらに重量12kgにも達するこのシャーシを、重量15kgもの真鍮製フローティングベースで支え、その全体を4個の大型サスペンションでフローティングし、外部からの振動もシャットアウトする設計だ。また、映像プログレッシブ回路と交換したスペシャル仕様のテーブルも豪華。Vタイプ用の脚部がアルミ角パイプ製に対し、本機はがっちりしたアルミ無垢材の脚部が、重量30kgもの天板を支えるもので、2段の棚板には同社

が推奨するデジタル伝送用ユニバーサル・プリアンプ、ミメイシス24MEなどがセットできるようになっている。気になる再生音の話の前にもう一つ。Aタイプは映像プログレッシブ回路なしと前記したが、後ろを見ると映像出力端子がある。と言うのも装備しないのは特別な高画質要求に応えたプログレッシブ回路であって、スタンダードな映像回路はそのまま残されている。したがって本機でDVDビデオの再生も可能なのだが、でも端子の目的はそれではなく、ごく例外的だがDVDオーディオ・ディスクの一部に、設定切替えがディスプレイ上でなくては



重量15kgにおよぶ真鍮製フローティングボード。本体シャーシと4個の大型サスペンションはこのボードを介して連結される。

不能なものがあるためだ。だが、いかに例外的ではあっても、そのためにはディスプレイが別に必要になる。オーディオヴァージョンであるからには、本来このディスプレイは本機に組み込まれているべきとも思うので、そこは少々納得のいかないところでもある。それはともかくとして、さっそく音を聴いた。本機で再生可能な市販ソフ



ゴールドムンド Eidos Reference-A

¥8,500,000 — 81,300

●再生可能ディスク:SACDステレオ&マルチ、DVDオーディオ&ビデオ、CD他 ●デジタル出力(PCM):同軸2系統(RCA)、光1系統(TOS)、CD専用・バランス1系統(XLR) ●アナログ出力2ch・アンバランス・1系統(RCA)、6ch・アンバランス1系統(RCA) ●寸法/重量:W580×H700×D550mm/75kg(専用テーブル含む) ●備考:世界50台限定 ●問合せ先:ステラヴォックス ジャパン(株) ☎03(3958)9333

81,300円
81,300円

付いた
誇張されないうりアリティ。
デジタル出力の音も
素晴らしい

トは、そのDVDビデオは仲間に入れないとして、CDのほか5・1ch再生にも対応するSACDとDVDオーディオだが、ここではもっとも興味のあるCDとSACDの2ch再生に焦点を

これまでに聞いた同社のCD再生は、どの場合にも特有の艶かしさや、バステルカラーのようなエキゾチックな色彩感に惹かれたが、その持ち味はここでも確かに受け継がれている。ジャズ

もクラシックもそんな味わいが格別だし、ことに声の官能的な肉感が魅力。と同時に、これまでのどれとも違うのは、そこに圧倒的な安定感と存在の確かさがあること。声も楽器もオーケス

トラも、ドンツと腰をおろしているのではなく豊かな空間に軽やかに暖かく響きよく舞うのだが、それがただ夢のように美しいのではなく、ひとつ一つの動きにも響きにも音像にも、地に足の付いた誇張されないリアルリティとでも言うか、そんな安定感に支えられているのが素晴らしい。

いっぽうSACDもベーシックな雰囲気はこれと変わらない。ただし、その空間に一層の豊かさや広がりが生まれているし、オーケストラはよりキメ細かく粒立ちよく、しかもゴリ付くようなオーディオっぽさとは異なる自然な感触であられる。ヴォーカルの音像も同様に、CD的なやや誇張された輪郭よりもっと控え目なあらわれ方が心地いいのだが、でも反面では音像が少

し奥に引込むようにも感じ、もう少しメリハリを立てて前に張り出す雰囲気も欲しいとも思わせたりはする。

このSACDはアナログ出力のみだが、CDにはデジタル出力もあるのので、試しにとそれをアキュフェーズのD/Aコンバーター、DC101に接続してみたが、これが素晴らしい。過去にこのD/Aコンバーターから聞いたことのない、音の厚さ、響きの豊かさ、そして圧倒的な安定感なのである。もちろんDC101にこんな豪華なCDトランスポートを組み合わせたのも初めてのことで、不思議なことデジタルもアナログプレーヤーと同じように、やはり機器の質量が音にあらわれるのかと、改めて考えさせられたのだった。

開発者からのメッセージ



Goldmund
Michel Reverchon

設計のポイントは?

ゴールドムンドがEidos Referenceを開発するにあたってのゴールは、ちょうど20年前に存在していたGoldmund Referenceレコードプレーヤーの純然たる後継機を提供することでした。

この新しいEidos Referenceの開発における最大の困難はメカニズムの選定でした。すべてのマルチメカに言えることですが、CD再生時の読み取り精度の低さは到底ゴールドムンドが満足のいくものではありませんでした。様々な共振がメカ内で発生するからです。われわれは安価な台湾製のメカから、もっとも高価なメカまで、ありとあらゆるメカを実際に評価してみました。例えどんなによいメカであっても、CDとDVD、SACDのすべてにおいて、満足のいく読み取り精度を持つものではありませんでした。マルチフォーマットメカニズムでありながら最高のCD再生をも可能にするメカを実現するという命題の中で、見出した最良の結論はクセの無い素直なマルチフォーマットメカニズムを使用し、それを徹底的にチューンナップすることでした。詳細に検討した結果、パイオニア製メカニズムが、もっともクセが少なく素性が素直で、かつ、われわれが望むように最高のCDメカとしても動作するようにモディファイ可能であることがわかりました。

結果、Eidos Referenceのドライブメカは、ベースとしてパイオニア製メカを採用していますが、ほとんどすべての部分をリチューンしています。モーターを含む可動部分を作り換え、非常にリジッドな構造とし、第2世代となる「Goldmund Magnetic Damper」機構により、レンズ部分の振動を皆無としています。これらのことによりCDに限らず、すべてのディスクにおいて読み取り精度が極限にまで向上しています。